

◆2021年4月第3週の説教

■日時：2021年4月18日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「隣り人を愛すること」

■聖書：ルカによる福音書10：25－37（p126）

■讃美歌：16「われらの主こそは」・566「むくいを望まで」

お早うございます。

高齢者へのワクチンの接種が始まったと共に、第4派が訪れ、大阪では医療崩壊が起きています。「まん延防止等重点措置」対象地域となる地方自治体も次々に現れ、ワクチンによってどこまで収束を抑えられるのか予断を許しません。私たちも、ワクチンの接種を終えるまで、健康にはしっかり気を付けて過ごしたいと思います。

マルコによる福音書の講解説教が終わり、先週は、マルコが1章1節に記した「神の子、イエス・キリストの福音の初め」の意味を、改めて振り返る時としました。イエス様と出会った律法学者、十字架の刑を見届けた百人隊長、遺体の引き取りを願ったアリマタヤのヨセフらを取り上げ、福音は、その人の置かれている立場や階級を越えて、「神の国を待ち望む」全ての人に開かれていることを学びました。そして、今朝は、もう一人の福音書記者であるルカが記した「善きサマリア人」の譬えから、隣人を愛することについて考えてみたいと思います。

すでにお気づきだと思いますが、ルカが記しているこの箇所は、マルコが記したイエス様と律法学者との語らいの場面と同じです。ただ同じ場面ではあっても、マルコとルカとでは内容が微妙に違っています。マルコは、律法学者の答えをイエス様が賞賛しているのに対して、ルカは、賞賛に代えて、イエス様が律法学者に語った「善きサマリア人」の譬えを記しています。私がここで注目したいのは、マルコが記した内容をさらに深く考えた時、この「善きサマリア人」の話しに辿り着くのではないかと言うことです。

マルコは、イエス様と律法学者との出会いの場面をどのように記したのか、もう一度見ておきたいと思います。87頁、マルコによる福音書第12章28節から34節までですが、特に最後の34節に注目します。

34：イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。

私は、マルコが記したこの場面は、イエス様の十字架と復活の出来事の次に位置するほどの重要な場面と理解しています。主イエス・キリストの十字架と復活が、救い（新しい命に生きること）の業の成就を意味し、神の国への招きを告げ知らせるなら、神を愛し、隣人を

愛することは、この救いに与り、神の国に招き入れられるに相応しい者となることだからです。その事を、この律法学者は理解していました。そして、そこに居合わせた人々も又、この福音の真理を知らされ、「もはや、あえて質問する者はなかった」という状況が生まれています。

しかし、私たちがさらに律法学者との問答に深く立ち入る時、彼に対するイエス様の賞賛の言葉をもって良しと出来ないことに気が付きます。イエス様は、この律法学者の答えを賞めつつも、さらに彼になお足りぬものを指摘しています。それは、「遠くない」と言う言葉から分かります。「あなたは神の国から遠くない」、即ち、神の国はあなたのすぐ近くまで来ている。しかし、今なお神の国はあなたに与えられていないのです。

律法学者の答えは信実なものでした。

彼も又、アリマタヤのヨセフと同じに、神の国を待ち望む者でした。

それ故にこそ、イエス様は、「遠くない」と言う言葉に、神の国に入るためのなお一つ、なすべきことを示されたのだと思います。

なお一つなすべきこととは何でしょうか。

それは、ルカが記している「善きサマリア人」の譬えを実践する者となることでした。

30節から読みます。

30：イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。

恐ろしい場面です。想像するだけでも考えたくありません。自分が襲われた側であったならどうなるのだろうかと思います。瀕死のまま、息も絶え絶えに、助けを呼ぶ力さえ無くなっているかも知れません。

その時です。31 節。

31：ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向う側を通って行った。

寒々しい光景です。祭司、それは、ユダヤ社会においては民を導く精神的指導者です。彼らは国民の良識を代表し、イスラエルの伝統を守り続ける地位にあり、人々からは尊敬の眼差しを受けていました。しかし、通りかかったこの時、彼にとっては、自分の職業や人々からの評価など問題ではありませんでした。彼はただ、面倒なことには関わりたくなかったのです。倒れている人がどれほどの助けを必要としているかなど、彼には関心がありませんで

した。あるいは、少しは気にかかったかも知れません。しかし、自分の身の安全を守ることを優先しました。

32 節です。

32：同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向う側を通って行った。

倒れているその人に近寄るのではなく、遠ざかる。見て見ぬふりをするのです。

レビ人とは、かつては祭司階級を構成した人々でしたが、今なお神殿で特別の職業に就く人々でした。しかし、彼も又自分の身に不利益が降りかかるのを避けてました。

その時、33、34 節です。

33：ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、

34：近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。

驚きの場面が生まれます。

ここに登場するサマリア人は、ユダヤ社会では、疎外され、蔑まれた人々です。異邦の民であるが故に、忌み嫌われ、ユダヤ人とは敵対関係にありました。そのサマリア人が、自分たちの敵でありながら、今助けを必要としている傷ついたユダヤ人に手を差し伸べたのです。それだけではありません。35節です。

35：そして、翌日になると、デナリオン銀貨2枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱して下さい。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』

誰もが関わりたくない者に自ら進んで近寄り、傷口の手当てをし、大切なるばに乗せ、宿屋まで運び、さらには手当てにかかる費用を負担したばかりでなく、足りなければさらに払うとまでこのサマリア人は申し出たのです。彼にとって何の利益になるわけでもありません。それどころか、敵ですらある者に対してです。

私たちに出来るでしょうか？

そして又、彼はなぜ出来たのでしょうか？

イエス様の話しは続きます。36、37節です。

36：さて、あなたはこの3人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」

37：律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行

って、あなたも同じようにしなさい。」

37節の最後にイエス様が語られた言葉は、マルコにはありません。

「行って、あなたも同じようにしなさい。」

マルコが記した「あなたは神の国から遠くない」、即ち神の国に入るためのあと一つの為すべきこと、それは、ここにルカが記した「行って、あなたも同じようにしなさい」だと思ふのです。

この時、私たちに語りかけて来るイエス様の言葉が響きます。

「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」との御言葉です。

113 頁、同じく、ルカによる福音書 6 章 27 節から 36 節です。

読んでみます。

27：「しかし、わたしの言葉を聞いているあなたがたに言う。敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にいなさい。

28：悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい。

大きな溜息が出ます。

29：あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着をも拒んではならない。

30：求める者には、だれにでも与えなさい。あなたの持ち物を奪う者から取り返そうとしてはならない。

そんな事は無理ですとの声が聞こえます。

そんな事をしたら、今の世の中を生きて行くことが出来ず、野垂れ死にしてしまいますとの声が聞こえます。

32：人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。

32：自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな恵みがあろうか。罪人でも、愛してくれる人を愛している。

33：また、自分によくしてくれる人に善いことをしたところで、どんな恵みがあろうか。罪人でも同じことをしている。

確かに、この 3 節は理解出来ます。

特に、32 節にある、「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」は良く分かり

ます。

しかし、34,35節で、キリスト者であることのハードルが又上がるのです。

34：返してもらふことを当てにして貸したところで、どんな恵みがあるのか。罪人さえ、同じものを返してもらおうとして、罪人に貸すのである。

35：しかし、あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、たくさんの報いがあり、いと高き方の子となる。いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである。

そして、この話を締めくくる最後の御言葉です。

36：あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。

ルカが記した、イエス様との律法学者との問答の終わりの言葉です。

これらの言葉を読み終えて感じるがあります。

マルコは、マルコ自身のイエス様への理解から、イエス様の生涯を記録しました。

ルカも又、ルカ自身のイエス様への理解をもとに、イエス様の生涯を記録しました。

この二人には、主イエス・キリストこそ、神様の独り子であり、救い主であるとの共通の理解に立ちながら、福音についてマルコが強調したかったことと、ルカが強調したかったことには特色があるように思いました。それが、ルカの今お読みした箇所からも滲み出ているのを覚えます。

そして、私たちの教会の交わりを思うのです。

聖書は、教養の書として読む本ではありません。

あるいは、道徳の本として目を通す物でもありません。

聖書は、生きるために、私たちに与えられています。

今日学んだ「善きサマリア人」と同じ生を生き、又今お読みした 27 節から 36 節に記されているように生きることを聖書は私たちに呼びかけています。

そのことを、なお一層真剣に考えて、自分の歩みを振り返りたいと思います。

祈りましょう。